

13章、14章

テーマ:ダビデの息子たちの犯罪—アムノンとアブシャロム

昔からよく言われることばに、「もしダンスをしたいなら、バイオリン弾きにお金を払わなくてはならない(訳注:原文は If you are going to dance, you are going to have to pay the fiddler.:つまり、参加するためには、自分も貢献しなければならない、の意)」というのがあります。もし、罪に浸ろうとするなら、その結果に苦しまなければならないのです。主はガラテヤ人への手紙6:7で、それをまっすぐに語っておられます。

(ガラテヤ6:7)「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」

罪を犯して、上手くやりおおせることはできません。ガラテヤ人への手紙6:8には続けてこう書かれています。

(ガラテヤ6:8)「自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」

ダビデが肉のために蒔いたことは疑問の余地がありません。ダビデが感じの良い小さな告白をしたので、これでおしまい、自分の罪から関わりなく去れる、などと、一時たりとも思わないでください。人々が、「だって、キリストの血が覆ってくださるから」

と口に出すのを、私は聞いてきました。確かにそうです。そして救いを失うことはありません。でも、罪はメスで切り開かなければならない、膿をもった傷を作り出すのだということを言っておきたいのです。

13章に入ります。ダビデは自分の罪の告白をしました。神さまはダビデに言われました。「あなたの罪のせいで、わたしの敵はわたしを冒涇した。わたしはあなたを見捨てはしないが、あなたはこのままやり過ごすことはできない。」神さまが私たちをお見捨てにならないことを主に感謝しましょう。でも、(罪の結果は)必ず、自分にはね返って来るのです。

ダビデの娘がダビデの息子によって強姦される

(II サムエル記13:1)「その後のことである。ダビデの子アブシャロムに、タマルという名の美しい妹がいたが、ダビデの子アムノンは彼女を恋していた。」

アブシャロムとタマルは父も母も同じでしたが、タマルはアムノンの半分だけの妹でした。どちらの父親もダビデではありましたが、母親が違ったのです。

(II サムエル記13:2-4)「アムノンは、妹タマルのために、苦しんで、わずらうようになった。というのは、彼女が処女であって、アムノンには、彼女に何かするということはとてもできないと思われたからである。アムノンには、ダビデの兄弟シムアの子でヨナダブという名の友人がいた。ヨナダブは非常に悪賢い男であった。彼はアムノンに言った。『王子さま。あなたは、なぜ、朝ごとにやつれていくのか、そのわけを話してくれませんか。』アムノンは彼に言った。『私は、兄弟アブシャロムの妹タマルを愛している。』」

アムノンは食事をとりませんでした。彼はあまりにもタマルを愛していたので、食欲をなくしてしまったのです。彼の友人は彼が食事をしないのを見ました。同時に、彼は問題にも気づきました。なぜなら、タマルはアブシャロムの妹であり、アムノンはアブシャロムを恐れていたからです。

(II サムエル記13:5-7)「ヨナダブは彼に言った。『あなたは床に伏せて、仮病を使いなさい。あなたの父君が見舞いに来られたら、こう言いなさい。『どうか、妹のタマルをよこして、私に食事をさせ、私に見えるように、この目の前で病人食を作らせてください。タマルの手から、それを食べたいのです。』』そこでアムノンは床につき、仮病を使った。王が見舞いに来ると、アムノンは王に言った。『どうか、妹のタマルをよこし、目

の前で二つの甘いパンを作らせてください。私は彼女の手から食べたいのです。』そこでダビデは、タマルの家に人をやって言った。『兄さんのアムノンの家に行って、病人食を作ってあげなさい。』

次に何が起こったかの汚れた詳細が書かれている、このあとの数節を読む必要はないでしょう。アムノンはタマルをレイプしました。そのあと彼は、彼女を憎んだのです。

(II サムエル記13:15)「ところがアムノンは、ひどい憎しみにかられて、彼女をきらった。その憎しみは、彼がいだいた恋よりもひどかった。アムノンは彼女に言った。『さあ、出て行け。』」

とんでもないことがダビデの家に起こりました。アムノンはすることをしてしまうと、彼女を放り出しました。

(II サムエル記13:19)「タマルは頭に灰をかぶり、着ていたそでつきの長服を裂き、手を頭に置いて、歩きながら声をあげて泣いていた。」

タマルは家から放り出され、大いに悲嘆しています。

(II サムエル記13:20-21)「彼女の兄アブシャロムは彼女に言った。『おまえの兄アムノンが、おまえといっしょにいたのか。だが妹よ。今は黙っていなさい。あれはおまえの兄なのだ。あのことで心配しなくてもよい。』それでタマルは、兄アブシャロムの家で、ひとりわびしく暮らしていた。ダビデ王は、事の一部始終を聞いて激しく怒った。」

ダビデは何が起こったかを聞いて激しく怒りましたが、そのことについて何もしませんでした。ダビデは、聖書の中の多くのほかの男たちと似ています。彼は、悪い子どもを育てた、甘い父親でした。甘い父親が悪い子どもを育てることは、繰り返し繰り返し起こって来ました。

それはエリから始まりました。神さまの大祭司です。彼の息子たちは不道德だっただけでなく、よこしまで、宗教的な金儲けもしていました。そしてサムエルです。サムエルはエリの息子たちと同じ雰囲気の中で育てられましたから、(それを反面教師として)サムエルはもっと規律に厳格で息子たちの上にいくらかの権威とコントロールを持っていたらと思うられるかも知れませんが、でも、サムエルの息子たちは、墮落して不正直になりました。次はダビデです。彼はサムエルも、サムエルの息子たちも知っていました。(サムエルのしつけの結果を知っていたのですから、)ダビデはもっと子どもたちに厳しくしたと思われるかもしれませんが、そうではありませんでした。彼もまた、甘い父親でした。ダビデは、アムノンが妹のタマルにしたことについて、怒りました。でも、結局のところ、ダビデは自分の息子たちにどんな手本を示したと言うのでしょうか？(ダビデの罪が)自分にはね返り始めています。

私が古いことを言うので、おそらくあなたは私がお堅い人物だと思っていらっしゃることでしょう。でも、今日のクリスチャン・ホームのおもな問題は、手本としつけが欠如していることだと私は確信しています。もしあなたがクリスチャンで、おうちにいたずら小僧がいるのなら、彼に講義をすることに時間を割くのはおやめなさい。そんなことをしても、何の足しにもなりません。彼に手本としつけを与えるのです。そしてすぐに始めなさい。なぜなら、彼が家から出て行く日が来るからです。

ダビデのもうひとつの打撃は、彼には複数の妻と多くのこどもたちがいたという事実です。多くの重要な責任のある王として、彼がどれだけ自分の子どもたちをしつけるために時間を費やしたと思いますか？クリスチャンの働きに関わっている多くの人たちの問題は、おそらく、働きのために家族をないがしろにすることでしょう。私たちは、自分たちがクリスチャンの働きに関わっているのだからと言って、家族をないがしろにすることを言い訳します。私は告白しなければなりません。もしも私が昔に戻ってやり直すことができるとしたら、娘が小さい頃にもっと時間をともにすごしたいと思いますなぜだか分かりますか？彼女が小さかったとき、私は忙しすぎました。今はそんなに忙しくありませんから、私は孫たちと時間を過ごすことができます。

クリスチャンの親たちは、自分の子どもたちを訓練するのに時間をかける必要がある、ということを自覚する必要があります。自分は小さな天使を育てているなどという印象を持ってはなりません。子どもがまるで西洋ランとドレスデン磁器(訳注:織細で豪華な装飾で有名なドイツの磁器)の掛け合わせでもあるかのように扱う両親が大ぜいいます。They believe that if they apply the board of education to the seat of knowledge they will break him in pieces or he will come apart. 彼らは、もし自分たちが教育委員会

を知識の座に据えるなら、(訳注:the board of education は教育委員会ですが、子どもを懲らしめるための板のこと、the seat of knowledge は知識の座、つまり子どものおしりで、子どもが悪いことをしたときに板でおしりを叩くことを言っているのだと思われます)その子を粉々に砕いてしまうか、その子がばらばらになってしまうと思っています。箴言23:13にはこう書かれています。

(箴言23:13)「子どもを懲らすことを差し控えてはならない。むちで打っても、彼は死ぬことはない。」

ダビデはアムノンが作り出した問題に対して、何もませんでした。さて、そのあと何が起こったのでしょうか？

(II サムエル記13:22)「アブシャロムは、アムノンにこのことが良いとも悪いとも何も言わなかった。アブシャロムは、アムノンが妹タマルをはずかしめたことで、彼を憎んでいたからである。」

皆さん。これがダビデの家庭です。ダビデの家庭生活です。彼は自分の罪を上手くやりおおせることはありませんでした。神さまは私たちも罪をやりおおせることはないと言われます。アブシャロムはチャンスを待っています。彼はアムノンに仕返しができる日を待っているのです。そして、その日がやってきます。

アムノン、アブシャロムに殺される

この時点では詳細に立ち入ることはしませんが、アブシャロムがアムノンを殺した日が来ました。アブシャロムは行動に出るまで、2年待ちました。彼は、王の息子たちを、羊の毛の刈り取りの祝いに招きました。アブシャロムは復讐をしたいという様子をまったく見せませんでしたから、ダビデはアムノンを行かせてパーティーに出席させました。

(II サムエル記13:28)「アブシャロムは自分に仕える若い者たちに命じて言った。『よく注意して、アムノンが酔って上きげんになったとき、私が「アムノンを打て」と言ったら、彼を殺せ。恐れてはならない。この私が命じるのではない。強くあれ。力ある者となれ。』」

アムノンが「酔って上きげんになったとき」、アブシャロムは彼を殺させました。

ダビデが最初に受けたメッセージは、王の息子たちすべてが殺された、というものでした。そのあと、ヨナダブがダビデに、アムノンだけが殺されたのだと告げます。

(II サムエル記13:33-35)「『今、王さま。王子たち全部が殺された、という知らせを心に留めないでください。アムノンだけが死んだのです。』一方、アブシャロムは逃げた。見張りの若者が目を上げて見ると、見よ、彼のうしろの山沿いの道から大ぜいの人々がやって来るところであった。ヨナダブは王に言った。『ご覧ください。王子たちが来られます。このしもべが申し上げたとおりになりました。』」

アムノンの殺人を実際に企んだのはアブシャロムですから、彼は逃亡しなければなりません。

(II サムエル記13:36-37)「彼が語り終えたとき、そこに王子たちが来て、声をあげて泣いた。王もその家来たちもみな、非常に激しく泣いた。アブシャロムは、ゲシュルの王アミフデの子タルマイのところに逃げた。ダビデは、いつまでもアムノンの死を嘆き悲しんでいた。」

アブシャロムがゲシュルの王のところに逃げた理由のひとつは、アブシャロムの母親がゲシュルの王の娘だったということでした。前にも指摘しましたが、ダビデがこの外国人の女性と結婚したことは間違いでした。彼は、信仰が落ち込んでイスラエルの地から退いていた間にこの女性と結婚したことを思い出してください。彼女は王に、とても魅力的なふたりの子どもを産みました。ひとりアブシャロム、もうひとりタマルでした。見たところ、ダビデは異教徒でベドウィンであった母親の、この気ままな息子をしつけませんでした。ある意味では、アブシャロムがやったことは正当化されるように見えます。なぜなら、アムノンが罪を犯したとき、ダビデはこの処理に乗り出すことをしなかったからです。

(II サムエル記13:38-39)「アブシャロムは、ゲシュルに逃げて行き、三年の間そこにいた。ダビデ王はアブシャロムに会いに出ることはやめた。アムノンが死んだので、アムノンのために悔やんでいたからである。」

アムノンのいのちを奪ったあと、アブシャロムは逃げました。ダビデは彼を連れ戻したかったのですが、そうしませんでした。ダビデはアブシャロムのために嘆きました。それだけしかしませんでした。ダビデはアブシャロムのために嘆き、彼が戻ってくることを願いました。アブシャロムは、息子のうちのだれよりもダビデに似ていたのではないのでしょうか。ダビデはアブシャロムに次のイスラエルの王として、自分の後を継がせようとしていたのだと思います。これから見ていくように、その野望はアブシャロムの頭の中にも潜んでいました。

ダビデ、アブシャロムが帰ってくることを許可する

(II サムエル記14:1-3)「ツェルヤの子ヨアブは、王がアブシャロムに敵意をいただいているのに気づいた。ヨアブはテコアに人をやって、そこからひとりの知恵のある女を連れて来て、彼女に言った。『あなたは喪に服している者を装い、喪服を着て、身に油も塗らず、死んだ人のために長い間、喪に服している女のようになって、王のもとに行き、王にこのように話してくれまいか。』こうしてヨアブは彼女の口にことばを授けた。」ヨアブはテコアの近隣で育ちました。この女性を前から知っていたかもしれません。

(II サムエル記14:4-7)「テコアの女は、王に話したとき、地にひれ伏し、礼をして言った。『お救いください。王さま。』それで、王は彼女に言った。『いったい、どうしたのか。』彼女は答えた。『実は、この私は、やもめで、私の夫はなくなりました。このはしためには、ふたりの息子がいましたが、ふたりが野原でけんかをして、だれもふたりを仲裁する者がいなかったので、ひとりが相手を打ち殺してしまいました。そのうえ、親族全体がこのはしために詰め寄って、「兄弟を打った者を引き渡せ。あれが殺した兄弟のいのちのために、あれを殺し、この家の世継ぎをも根絶やしにしよう」と申します。あの人たちは残された私の一つの火種を消して、私の夫の名だけではなく、残りの者までも、この地上に残さないようにするのです。』」ヨアブは、この女性に悲しい話をさせてダビデの感情につけこませます。ダビデがうそを利用したように、今、彼がうそをつかれるのです。

(II サムエル記14:11)「そこで彼女は言った。『どうか王さま。あなたの神、【主】に心を留め、血の復讐をする者が殺すことをくり返さず、私の息子を根絶やしにしないようにしてください。』王は言った。『【主】は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。』」ダビデは彼女の空想上の息子に、完全な赦しを与えます。すると、彼女はダビデとアブシャロムにこのことを適用します。

(II サムエル記14:13)「女は言った。『あなたはどうして、このような神の民に逆らうようなことを、計られたのですか。王は、先のようなことを語られて、ご自分を罪ある者とされています。王は追放された者を戻しておられません。』」

テコアのやもめは、ダビデを空想上の検察官の場所に置きました。検察官が彼女の残された息子にしたであろうことを、ダビデは神さまの民に対して行っていたのです。ダビデはアブシャロムを彼の犯した犯罪のために罰していました。彼女は、やもめの母親として、イスラエルの民を代表しています。彼女は全イスラエルに代わって話していると主張します。ことによると、彼らの感情を表現しているかも知れません。アブシャロムは、民にとっても人気がありました。彼らはおそらく、アムノンは当然の報いを受けたと感じていたことでしょう。

このできごとの最終的な成り行きは、ダビデは熱心さに欠けたまま、アブシャロムが戻ってくることを許可します。

(II サムエル記14:21-24)「それで、王はヨアブに言った。『よろしい。その願いを聞き入れた。行って、若者アブシャロムを連れ戻しなさい。』ヨアブは地にひれ伏して、礼をし、王に祝福のことばを述べて言った。『きょう、このしもべは、私があなたのご好意にあずかっていることがわかりました。王さま。王さまはこのし

もべの願いを聞き入れてくださったからです。』そこでヨアブはすぐゲシュルに出かけて行き、アブシャロムをエルサレムに連れて来た。王は言った。『あれは自分の家に引きこもっていなければならない。私の顔を見ることはならぬ。』それでアブシャロムは家に引きこもり、王の顔を見なかった。」

ダビデが自分の息子に会いたくないと言うのは、不幸なことです。実際、そのことが15章で起きるアブシャロムの反乱のお膳立てをします。アブシャロムは悪い子でしたが、優秀な政治家でした。次の章でそのことを見て行きます。

ヨアブの大麦の畑に火をつけて、ヨアブが自分のところに来るように仕向けるというアブシャロムの高飛車な行動は、アブシャロムの性格を明らかにする、もうひとつのできごとです。

(II サムエル記14:32-33)「アブシャロムはヨアブに答えた。『私はあなたのところに人をやり、ここに来てくれ、と言わせたではないか。私はあなたを王のもとに遣わし、「なぜ、私をゲシュルから帰って来させたのですか。あそこにとどまっていたほうが、まだ、ましでしたのに」と言ってもらいたかったのだ。今、私は王の顔を拝したい。もし私に咎があるなら、王に殺されてもかまわない。』それで、ヨアブは王のところに行き、王に告げたので、王はアブシャロムを呼び寄せた。アブシャロムは王のところに来て、王の前で地にひれ伏して礼をした。王はアブシャロムに口づけした。」

いたずらによって、アブシャロムは和解のために自分を父のところ連れて行くことをヨアブに納得させます。ダビデの口づけは、完全な和解とアブシャロムの王の息子としての地位の回復のしるしではありますが、しぶしぶ与えられたものでした。自分の父がすぐに、心からの赦しをくれなかったという事実が、彼のたましいにわだかまりを与えました。

神さまはダビデを本気で赦してくださいました。神さまは「まあ、おまえを赦してはやるが、交わりはもう持たないぞわたしはお前の救いの喜びを回復することはしない」

などとは言われなかったのです。神さまが赦されるとき、神さまは完全に赦されます。あなたも私も、次のように勧告されています。

(エペソ4:32)「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」

神さまは私たちを赦してくださったのでしょうか？ そのとおりです！ どのようにしてほかの人を赦せばよいのでしょうか？ 神さまと同じようにして赦すのです。ダビデはアブシャロムを赦してやるべきでした。ダビデは、反抗のお膳立てをしてしまっています。

私たちの神さまは赦して下さる神さまです。ガラテヤ人への手紙6:1にはこう書かれています。

(ガラテヤ6:1)「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」

私たちの多くは、どうもこの節を正しく読んでいないようです。私たちはこれが、「もしだれかがあやまちにおちいったなら、野球のバットを持ってきて、その人の頭をガツンとやりなさい」と言っていると考えます。私たちは赦すのに遅い者であり、ときにはとても意地悪で、愛がなく、批判的になることもあります。真実が語られなければならないときがありますが、赦しを求められたときには、すぐに赦しの手を差し伸べてあげるべきなのです。

ダビデは、神さまが自分を赦してくださったようには自分の息子を赦さなかったことでしくじりました。彼は一生、そのことを悔やむことになります。